

**古文書解読事典
文書館へいこう**

大石 学監修
太田尚宏・中村大介編
東京堂出版 1998.9
442p 21cm 2,800円

表題からしてユニークである。「古文書解読事典」は古文書解読事典なのだろうし、「文書館へいこう」は博物館へ行こう様のパンフレット系書籍の文書館版かなと勝手に考えていたが、そこはさすがに鋭い視点の大石学氏監修だけあって、その2つが合体している「事典」なのである。

本書の構成は「第一部・古文書を知ろう」、「第二部・古文書を読もう」、「第三部・文書館へ行こう」の3部からなっている。

まず、「第一部・古文書を知ろう」は「古文書とはどのようなものなのか具体的に知るために、江戸時代の古文書の実際を収録している」(「はじめに」より)

扉ページに江戸時代の文書システムの概略図が示してあり、将軍から農民・町民までの文書の流れと番号が付してある。内容部分ではその番号に従い、古文書を写真掲載し、文

書の読み方、解説をそれぞれ付している。古文書の内容的には従来の古文書解説事典とさしたる変化はないが、文書システムにのっとり差出人と宛所を類型化しているところが目新しい。

「第二部・古文書を読もう」は「本書の中心部分」である古文書解説事典部分である。目次をみると

- ◇ メニュー1 文字を検索する
- ◇ メニュー2 さまざまなアプローチ
 - アプローチA 構成から読む
 - アプローチB 文法から読む
 - アプローチC この一字をもとに
 - アプローチD テーマ別イデオロム集

という構成になっている。

目次表題は上記の通りカタカナ言葉が並んでおり、目新しさを感じさせる。各メニュー内も「類出用語集」「困ったときには」「この一文字をもとに」など、いかに古文書を読む手がかりを与えることができるかという悪戦苦闘のあとが忍ばれる。活字のポイントも大きく—その分用例は少なくなってしまうが—構成表題にカタカナが使用されている点など、若い世代(?)には受け入れやすいだろう。

ただ、内容的には結局は林英夫編『新編古文書解説字典』(1993柏書房)と大きな変わりはないし、用例数では児玉幸多編『くずし字用例字典』(1981近藤出版)にははるかに及ばない。実際の辞書としてどの程度役立つか、少々心許ない。

「第三部・文書館へ行こう」はページ数にしてわずか14ページしかない。

その内容であるが、「研究テーマを立てる」→「予備知識を得る」→「古文書解説の七つ道具」→「文書館へ行く」→「古文書目録の見方」→「古文書を出納してもらおう」→「古文書閲覧のルール」→「原稿用紙への記入例」→「古文書を複写する」となっている。

古文書調査の入門書としてかつて児玉幸多編『古文書調査ハンドブック』(1983吉川弘文館)があったが、現在では時勢にあわない

部分も出てきている。本書「はじめに」あるとおり史料保存利用機関に史料が収蔵されることが一般的となり、そこで古文書を利用する—我々の立場からいえば利用していただく—一際のととてもとても基本的な、もっとも初歩的な手引としての利用価値は高い。なにしろ、目録の読み方や、閲覧カードの書き方まで出ているのだから。

しかし全体的には「文書館へ行こう」と表題に列記するには「文書館へ行こう」部分は少なすぎるのではないか。また「文書館へ行こう」が先で「古文書解説事典」が後の方が流れとしてはスムーズである気もする。

が、いずれにしてもいままで史料保存利用機関に勤務する我々が怠っていた一般(とりわけ文書館という言葉すら知らない人たち)への広報・啓蒙にはなり得る。

全体としてはかなり初心者向けであり、我々の要求を満たす物ではないが、歴史学や史料学を学び始めた学生には、よい入門書となるだろう。

長佐古美奈子・学習院大学史料館